

英語教育, 次の時代へ

今年の4月から、改訂版の教科書の使用が開始されます。また、次の学習指導要領についての議論も始まっています。

これから英語教育はどうなっていくのか、またそのために現場で考え、実践すべきことはどのようなことなのか、英語教育に携わる19名の先生方にさまざまな角度からご意見をいただきました。

キーワード：

英語教育の課題／大学入試改革／CAN-DO リスト／アクティブ・ラーニング／
協同（協働）学習／ICT／語彙・文法／言語活動／海外の状況／英語で授業／
外国語運用能力の育成／グローバル化／題材

キーワードで語るこれからの英語教育の課題 根岸雅史 Negishi Masashi (東京外国語大学)

本稿では、今後着目のキーワードに焦点を当てて、これからの英語教育の課題を展望する。

まず、口頭の「やりとり」である。「やりとり」とは、CEFRではSpoken Interactionと呼ばれ、「会話」を表す。これまで「話すこと」の指導では、スピーチやプレゼンの指導が中心だったかもしれないが、これらはCEFRではSpoken Production（発表）として、「やりとり」と区別されている。もし「話すこと」の指導が「発表」だけで、「やりとり」がないとしたら、それは偏った指導ということになる。

この「やりとり」は、「即興」である。これは、準備して行うことの多い「発表」と大きく異なる点だ。決まり文句を覚えたり、文型練習をしたりということは、「やりとり」の指導でも必要だろう。しかし、最終的には、「やりとり」は「即興」でできるようにならなければならない。そして、その「やりとり」を継続して行うには、生徒は自分で話す内容を考えながら話し続けなければならない。したがって、その指導にあたっては、あらかじめ原稿を準備して話すのではなく、その場で考えて即興で話すなどの言語活動を繰り

返し行うことが重要である。

もう1つのキーワードは、「概要と要点」だ。英語力調査で課題として取り上げられているが、現行学習指導要領には明確な定義はない。様々な調査で、「概要と要点」の指導は行っているという認識が教師にも生徒にもあるが、英語力調査の結果を見れば、「概要と要点」をとらえる力が身につけていないことは明らかだ。問題は、「概要と要点」が、「大雑把な理解」程度としかとらえられていない点にある。

では、「概要と要点」の違いは、何であろうか。まず、「概要」は、特定の情報の取得ではなく、文章全体や話全体の流れを表したものだ。これに対して、「要点」は「点」である。さらに、この「要点」は、「話し手が伝えようとする点」と「聞き手として知りたい点」に分けられる。ただ、同じ「要点」でも、前者の方が後者よりはるかに難易度は高い。

「読むこと」や「聞くこと」という活動をただ大雑把に捉えるのではなく、このような枠組みを持って評価を考えることで、授業の活動を考えるヒントになることだろう。

大学入試改革と英語教育

2020年(平成32年)は、教育に関わる様々な改革が導入される節目の年といえるだろう。大学入試改革もこの年の実施を目指して急ピッチで議論が進んでおり、今の中学1年生が、新しいタイプの大学入試を初めて受ける学年となる予定だ。

制度面での骨子は、いわゆる「センター入試」を廃止し、代わりに「高等学校基礎学力テスト」と「大学入学希望者学力評価テスト」(いずれも仮称)を導入するというものである。(a)一発勝負ではなく、複数回の受験チャンスを与える、(b)学習指導要領で示されている「思考」「判断」「表現」、つまり知識の活用を問う問題を出題する、(c)科目を併せた「合科型」や、知識・技能を総動員して解答する「総合型」の問題を導入する、(d)Tablet PCを使ったコンピュータ適応型テストも考慮に入れ、(e)2次試験では面接や筆記、プロジェクトを実施しての総合的な評価を想定する、など様々な改革が検討されている。

英語教育に関しては、4技能直接測定型の試験導

竹内 理 Takeuchi Osamu (関西大学)

入が大きなポイントとなることは間違いないだろう。4技能とその統合的運用を、現実的な場面により近い形式で測定するテストは、作成・実施が難しいこともあり、大学入試ではあまり用いられてこなかった。しかし今回は、困難さを外部検定試験(英検、TEAP、TOEFL、TOEIC、IELTS等)の活用で解決しようとする方向性までが打ち出されており、私立大学の入試でも、この方向を先取り実施する動きが急速に進んでいる。従来、中等教育段階での英語教育が変わらないのは「大学英語入試に原因がある」といわれてきた。今回の改革に伴い、この理由付けは通用しにくくなる。それどころか、大学入試を起点に高等学校、中学校、そして小学校の英語教育までが、一貫した目標(コミュニケーション・ツールとしての英語活用力強化)のもとに切れ目なく接続されていくことになる。いわば、大学入試起点のバックワード・デザインが実施されようとしていることに、我々は意識を向ける必要があるだろう。

CAN-DO リスト～作成から活用へ～

「CAN-DO リスト」とは、「英語でできること」を1つずつ記述したもの(ディスクリプタ)を、技能ごとや能力ごとにリスト化したものを指す。CAN-DO リストは今では英語教育のキーワードの1つになったと言える。その背景には、2011年6月の「中・高等学校は、学習到達目標を『CAN-DO リスト』の形で設定する」という提言がある。これを受けて、地域や学校ごとに独自のCAN-DO リストが作成されてきており、すでにリストが完成している学校もある。

ただし、CAN-DO リストは作成して終わりというわけではない。それを授業や評価の場面で活用しなければ作成が徒労に終わってしまう。例えば、「地域や学校紹介のプレゼンテーションができる」というディスクリプタを取り上げるとする。ここから「自分の街の美術館の紹介をする」という言語活動を作成し、まずは紹介に必要な語彙や文法事項を学び、次に紹介の原稿を書かせ、そして、原稿を添削したものを暗記させて、プレゼンテーションを行えば、

工藤洋路 Kudo Yoji (玉川大学)

CAN-DO を指導において活用したと言える。そして、ステップを踏んだこの指導のおかげで、最後の発表も概ね成功することが期待される。

しかし、この段階で、このCAN-DO を達成したと判断するのは早合点である。この活動では練習をたくさん行った上で、先生からの支援を多く受けた直後での「成功」である。したがって、自力でこの活動を達成できるかどうかの評価にはならない。また、1回の言語活動だけは能力を上げるのには不十分である。元のディスクリプタでは「地域や学校」とあるところを、活動では「自分の町の美術館」に絞っている。つまり、1つのCAN-DO は、いくつかの類似した言語活動を徐々に自力で行うことで達成できるものでなければならない。この点を留意した上で、CAN-DO リストを作成し、それを上記の例のように活用しながら、そして、必要であれば、作成の段階に戻り、ディスクリプタに修正を入れるなどして、CAN-DO リストを日々更新していくことが大切である。

自立につながるアクティブ・ラーニング

山本崇雄 Yamamoto Takao (東京都立両国高等学校)

高大接続の改革の一環で、大学入試が大きく変わろうとしています。大学入試が変われば、授業が変わる。昔から言われてきたことです。では、大学入試が変わらなければ、授業は変わらないのでしょうか。

大学入試が変わらなくても、確実に変わっていくものがあります。それは、社会の変化です。多様化、国際化、情報化への変化の波は加速し、これまでの社会の常識を壊し始めています。

入試が変わってから授業を改善するのでは、社会の変化に対応できません。激変する社会に出ていく子どもたちの将来を考えたとき、これまで以上に生徒を自立させ、生きる力を身につけさせる観点が大切になってきます。

より国際化する社会で自立した人材を育てる観点からは、英語教育の果たす役割は大きいと言えます。英語教育を通して、将来、生徒が困難にぶつかったときに、英語を手段として、困難を乗り越える力を

身につけさせることは英語教育の大きな使命です。

自立を育てるためには教師の役割の変化も重要です。「丁寧に教え、間違えさせない指導」から「Try & Errorを繰り返し、自力で解決法を見つけさせる指導」への転換が求められます。それには、アクティブ・ラーニングで能動的に様々な学び方を身につけさせることが有効です。

学び方の選択肢を増やすことができた生徒は、目標に応じて、学び方を選び、解決方法につなげることができるようになります。これが「自立した学習者の育成」の意味するところです。

したがって、教科書の役割も、教師が丁寧に教えることを前提とした構成から、生徒自身で課題を発見し、解決していく構成への変化が求められます。

アクティブ・ラーニングなどの有効な手段を使い、教科書を能動的に学べる生徒を育て、将来英語を使って社会に貢献できる人材育成へとつなげていくことが我々教師に求められているのです。

英語教育としての協同学習：実質化と課題

亘理陽一 Watari Yoichi (静岡大学)

協同(働)学習において重要なのは、目標・役割分担の明確化と協同を要する課題の設定です。具体的な目標と役割が生徒に理解・共有されていて、その達成のためお互いのインタラクションや協同作業が欠かせないと生徒が実感できるような課題があって初めて真価を発揮するということです。何のためにやるのかよくわからないこと、ひとりのできるようなことで協力し合おうと思わないのはごく自然なことでしょう。機械的に分割しただけの「ジグソー」では何も生まれません。形だけの「協同」、協同学習のための協同学習ならやらないほうがマシです。

互いの信頼関係は協同学習の前提とされますが、一緒に何かに取り組むことを通じて互いを深く知るようになるわけですから、どのような環境であれ、手の届く「協同」から始めることが大切でしょう。一方で、関係形成・集団づくりを直接の目的とした協同学習には私は懐疑的です。互いを認め合えるような関係は、あくまで意味のある課題を通じた英語

使用・学習の結果についてくるものであって、それ自体を目的とするのは息苦しい気がします。

「協同」の範囲・形態は、クラスを超えて、もっと柔軟であって良いと思います。学年・学校を超えて先輩や後輩と交流したり、留学生に地域を案内したりと、多様な機会が多様な英語の学びを生みます。他方、常に課題となるのは、協同学習から一人ひとりが手応えを感じられるようにすることです。全体としてうまくいっているとその雰囲気に住居しがちですが、一人ひとりに「できた、わかった」という実感が伴わないと、特定の人に「ただ乗り」する状況が生まれます。実践研究として、協同の目的・対象・条件・文脈ごとに、過程と結果の両方が第三者にも見える形で、事例を蓄積・共有することが必要です。

協同学習を实らせるには複雑な準備・調整が求められ、時間もかかります。それに見合った「手応え」を得られるかどうかは、先生たちがその労を厭わず楽しめるかどうかにかかっていると言えるでしょう。

ICTの方向性

ICT (情報通信技術) が身近な存在になり、教育においても情報化が進められている。「フューチャースクール推進事業」(総務省) や「学びのイノベーション事業」(文部科学省) などの事業によりインフラ整備や授業方法研究が行われてきた。「平成 26 年度 学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果」(文部科学省, 2015) によれば, 2015 年 3 月時点で, ここ 10 年間の間に校内 LAN 整備率は 50.6% から 86.4% に, 電子黒板の整備状況は 7,832 台から 90,573 台に増加した。デジタル教材の活用率も高まっている。今後, 教育における ICT の活用はますます促進されるであろう。今から 15 年ほど前に, CALL の研究者である M. Warschauer は, 本やペンを活用した言語教育について BALL (book-assisted language learning) や PALL (pen-assisted language learning) と言わないようにいわずに CALL という用語は存在しなくなると述べている。ICT を活用した教育もいずれ日常化するだろう。

酒井英樹 Sakai Hideki (信州大学)

文部科学省 (2011) は「教育の情報化ビジョン」を発表し, ICT の特徴として時間的・空間的制約を超えることや双方向性を持つことなどを挙げ, 一斉学習・個別学習・協働学習の改善・促進につながるとしている。次期学習指導要領の議論の基となる「論点整理」(中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会, 2015) の中では, ICT 等を活用することによって繰り返し学習を行うことで定着を図ること (p.53) や効果的な言語活動を行うこと (p.44) などが指摘されている。前者は習慣形成の考え方に基づいた ICT の活用であり, 後者は CLT の考え方による活用であると言える。この 2 種類の活用に限るのではなく, 他にも, インターネットによる空間を超えた同期型・非同期型の音声・文字コミュニケーションの導入や, 英語による協働学習の媒体としての活用, マルチメディアを活かした英語のインプットの増強など, 効果的な英語学習につながる指導方法を研究する必要があると考える。

デジタル教科書使用の心得

英語の 4 技能育成の柱となるのは教科書の音読だ。通常の授業のゴールの一つは, 一人でも音読できるようにすることである。自立した学習者を育てるための指導で力を発揮するのが「デジタル教科書」だ。

デジタル教科書は, 基本的に教科書内の英文・内容を, スクリーンにそのまま映し出せる。生徒は自然と顔を上げて練習することになり, 教師は生徒の口元や発話を確認しながら授業ができる。

NEW CROWN のデジタル教科書では, スクリーンに映し出された英文をクリックすると, 全て瞬時に音声化できる。その他, フラッシュカードや音と文字を一致させる機能, マスキング (語句を隠し生徒に読ませる) などの機能もある。また, 「文法のまとめ」では, 視覚的な文法説明ができ, さらに書き込み機能でアンダーラインなどを引いて強調することもできる。

このように, デジタル教科書の利点は, ①各活動の利便性を高める, ②授業をよりわかりやすくでき

鈴木 悟 Suzuki Satoru (東京都立両国高等学校附属中学校)

る, などが挙げられる。様々な活動を短時間で済ませ, その分, 言語活動の種類や時間を増やしたりできるのも魅力だ。

授業の改善や工夫をしたくても紙の教科書では難しかった点が, デジタル教科書には備わっている。言い換えれば, 前述した様々な機能のメリットを享受するには, 教師の基本指導技術が不可欠だ。

将来, 生徒がデジタル教科書を使って家庭学習をしたり, 授業中にタブレット型のパソコンを使って国外にいる人と会話練習を行ったりできるようになるだろう。しかし, どれほど優れた ICT 機器が導入される時代になっても, 「自立した学習者を育てる」[4 技能が身につく] 日々の授業改善の志は忘れてはならない。普段からしっかりと音読指導を行い, 会話の継続を目指した言語活動を積み重ねていくような指導手順・授業計画の構築が ICT 機器やデジタル教科書を有効活用することにつながる。つまり普通の授業の一步先にデジタル教科書があるのだ。

語彙選択の視点

語彙を知らなければ何も伝えられないどころか、コミュニケーションそのものが成立しない。それだけに精選された語彙を学習者に身につけさせることが大切である。語彙を選ぶ際に、まず、使用頻度の高い語彙を選択する。次に、幅広い分野で広範囲に渡って使用される語彙を選択する。また、学習者に身近で自己表現活動で使用する語彙選択が要になる。

28NCでは、教師が学習者に学んでほしいと思う語彙として、①社会で必要とされている基本的な語彙(COBUILD5の3 diamondsと、LDOCE3のS1の語)、②実用英語の観点から英検5～3級の語彙、③平成10年の学習指導要領の「別表1」などの語彙、④平成24年度版検定教科書6社の語彙、⑤学習者コーパス(中学生によるスキット・日本紹介・スピーチ・将来の夢エッセイ・冬休みの日記などから構築)をもとにワードリストを作成し、使用頻度が高く、どの分野にも使用される1,200語程度を選定している。さて、小学校ではどのような語彙を選択しているの

日基滋之 Hidai Shigeyuki (玉川大学)

だろうか。小学校学習指導要領では、語彙より表現という言葉を使用し、「外国語の音声や基本的な表現」、「児童の発達の段階を考慮した表現」、「外来語など児童が聞いたことのある表現」を提案している。また、コミュニケーションの場面や動きの例で使用される表現を提案している。教科化に伴い、理解から表現する段階まで求められることが予想される。

これらの語彙をどのように身につけるべきかについて、Nationは、noticing(単語への気づき)、retrieval(単語を記憶から呼び起こすこと)、creative (generative) use(単語を創造的(生成的)に使用すること)という一連のステップを踏むことが重要であると述べている。28NCでは、Word Bankで語彙に着目し、Practiceでその語彙を思い起こし自分や友達について話す、書く活動を通して語彙を創造的に使用する活動を用意している。語彙習得に必要なこのプロセスを、ぜひ28NCを通して身につけていってほしいと願っている。

コミュニケーションを支える文法を実感させる

これからの英語授業では、4技能をフルに活用したコミュニケーション能力の育成がさらに求められます。しかし、中でも文法が重要であることは、まったく変わりません。残念ながら、文法指導に割ける時間には限りがあり、文法指導をより効率的に行うことが必要になってきます。

文法の形や意味だけでなく、どのような場面や文脈でその文法が使われるのかを理解してはじめて、その文法をコミュニケーションの中で活用することができます。文法の使用場面と形と意味を生徒が関連付けることができるよう、文法指導をいかにシンプルにデザインできるかが今後のカギです。

文法は、メッセージをやりとりする中で、情報を正しく伝えたり、微妙なニュアンスを相手に伝えたりするための重要な役割を担っています。限られた時間であったとしても、コミュニケーションを行うために文法が役立つことを生徒に具体的に実感させるため、文法指導における導入や説明、活動におい

田中武夫 Tanaka Takeo (山梨大学)

て、使用場面や文脈を工夫することが重要です。ある文法構造を使うことで、状況や情報をよりの確かつ具体的に伝えることができたり(例:現在完了で過去から現在までの継続を表す)、話し手の態度や感情をより繊細に伝えることができたり(例:助動詞mustで切迫した義務を伝える)、談話の中で情報をより効率よく伝えることができたり(例:関係代名詞で情報を凝縮して詳しく説明する)、文法を正しく身につけていれば、感情や状況をとても豊かに効率よく表現できることを生徒たちにぜひ具体的に伝えたいものです。

そのためにも、私たち教師も日頃から自分が英語を使う際、文法によってどのようにニュアンスが異なってくるのか、どのような文脈でその文法を使うことが自然なのか、なぜあえてその文法を使い分けるのかなど、文法の使用場面に敏感になり、コミュニケーションを支える文法を生徒に実感させる楽しい指導をデザインしていきましょう。

英語リーディング指導と教科書教材の課題

池野 修 Ikeno Osamu (愛媛大学)

英語リーディング(読解)のための教材・指導には様々な点でさらなる改善が求められる。これから目指すべき方向を明確に意識しておくねらいで、容易には解決が難しいものも含めて、課題のいくつかを以下にあげてみよう。(1)長めの英文(中3だと250~300語程度)を普段から読む機会を増やす。例えば各レッスンに一度は、まとまりのある長い英文を一気に読み切る練習をする。また、「難しめの英文を少量だけ読む」だけでなく、「やさしめの英文を大量に読む」を充実させる。(2)多様なジャンル・タイプの英文(e.g. 説明文, 論説文, 物語, メール, ウェブページ)を対象にして、英文タイプに合わせた様々な読み方を鍛える。(3)より真正な(authentic)な目的のために英文を読む活動を充実させる。「なぜこの英文を読むのか」に関して、「単語・文法を学ぶため」、「リーディングのスキルを向上させるため」という目的にとどまらず、「自分にとって意味のある情報を得るため」などのねらいを持つ読みになるように

する。(4)リーディングの授業が文法・語彙説明と意味確認だけで終わったり、単なる「答え合わせ」の授業になったりしないようにする。授業形態も、順番に和訳させていくスタイル、読解発問への解答を一斉で確認していくスタイルを改善する。(5)リーディングは個人の頭の中で起こる認知プロセスかもしれないが、リーディング「活動」は個人作業だけにせず、ペアやグループで相互作用をしながらも行うように工夫する。(6)学力差に対応した読みの教材や活動を準備する——英文は同じでも、レベル別課題を準備する、足場かけとなるヒント情報のレベルを調整する、学力差を利用した学び合いを工夫するなど。(7)読みの能力の評価は、授業で扱った英文(教科書本文)ではなく、その英文を読むことを通して向上させた能力を測ることができる、別の英文(同じテーマで、単語や文法の点でもバラレルなもの)を用いて行う。これらの課題も意識しながら、リーディング指導のさらなる改善を目指したい。

「深イイ」リーディングを目指そう

和田朋子 Wada Tomoko (工学院大学)

授業中に英語を読ませていて、読む内容と生徒の距離が、どこか遠いように感じたことはないだろうか。生徒は英語を読み、内容をなんとなくは理解しているものの、それがどこか「他人事」のままで終わっている、そう感じたことはないだろうか。

次世代に求められるリーディング指導、それは生徒自らが英語と向き合い、書かれている内容に対して自問自答をし、自発的にのめり込んでいくような態度を育てる指導なのではないかと考える。28NC2, Lesson 5, USE Read「Uluru」の第1段落を見てみよう。It looks like a mountain, but it is actually a very big rock. とあるが, mountain と big rock ではどのような違いがあるだろうか。Sometimes it looks red and sometimes it looks purple. とあるが, いつ赤色でいつ紫色なのだろうか。なぜ色が変わるのか。To most of these people, Uluru is just an interesting place. とあるが, 誰にとって is just an interesting place ではないのか。

これらの内容については教科書(p.62 Second Reading や Check)でも問われているので、まずは教科書の流れの通り、一通り答えさせればよいだろう。しかし、それが終わった後に、もう一度、上述の質問をすることで、生徒たちが文章を「読む」だけでなく、「読んで、(そこに書いてあることがつまりどういうことなのかを)考える」きっかけを作ることができるのではないだろうか。そして、この「なぜ」「どうして」を考える過程が、学習している内容と自身の距離を縮め、学習を「自分の事」とさせるのではないだろうか。

「読んで考える力」つまり「批判的に読む力」を育てることは、生徒の自発的な学習力を引き出すことにつながる。昨今は「深イイ話」のようなものがもてはやされているようだが、英語を「読む」ことこそが「深くて」「おもしろい」行為であり、真の英語力の伸長につながることを生徒に実感させたい。

言語活動中心の英語授業に必要な2つのこと

今井裕之 Imai Hiroyuki (関西大学)

小学校では、コミュニケーション活動を通じて体験的に英語を学び、中・高等学校でも、英語で授業をする（生徒も英語をたくさん使う）こと、技能の統合活動を行う（日本語訳を理解確認の手段にしない）こと、パフォーマンステストを導入し産出技能を評価することが求められている現在は、コミュニケーション活動が外国語教育の「手段でも目的でもある」時代である。

従来の教師主導型の授業展開（教師指示→生徒応答→教師評価）と違い、教室を情報と情感の行き交う豊かな言語使用の場にする発想が求められる。

1) 活動のゴール、ルール、ロール

レストランの店員と客を演じるロールプレイを3人グループで演じさせるとき、どんな配役が適当か。大阪府河内長野市の研究授業では、客2人、店員1人の設定だった、客同士は相手の注文を聞いて自分の注文を変えたりする。店員は2人の注文を個別にしっかり聞く。やや遠くに調理場を設定されていた

ので、調理場に戻って2人分の配膳をする間、店員は何度も注文を繰り返し呟いていた。役割（ロール）の工夫が言語活動の質を変える。

2) エラー対応

中学校の教室で学習者が I went to shop. と発話した時、教師はどう応じるべきだろうか。

A) No, say, I went shopping.

B) Oh, you went shopping?

C) What shop did you go?

教師の応答が A) では、go ~ing の学習直後ならいざ知らず、I went to a shop. と言いたかったかもしれない学習者は混乱する。C) または B) で会話をつなぐような、会話と指導の往還が求められる。

活動のデザインとやりとりの中での適切なフィードバックは、我々の指導技術のコアになるだろう。さらに「英語で授業」が真にインプット増になるよう、入門期音声指導、文字指導を適切に行えば、日本の英語教育は変わるかもしれない。

アクティビティを、もっとアクティブに考えよう！

三野宮 春子 Sannomiya Haruko (神戸市外国語大学)

ダヴィンチ作「最後の晚餐」に描かれた人物たちの位置や表情を13人で再現してみると、絵画を見ただけではわからない発見があるという。また、人工知能の開発研究では、生身の人間についても多くのことが明らかになっている。英語学習アクティビティも同じで、自分で試作・試用・修正を繰り返してみると、大事なことに気づくことがある。

筆者は「その場で相手と協働で意味を創っていく創造的なコミュニケーション活動」の開発に取り組む過程で、なぜ既存のアクティビティが「あらかじめ決まった答えを速く正確に再生する予定調和的な言語活動」を超えられていないか考えることになった。そして、英語教育のなかの多くの神話に気づかされた。ここで「神話」とは、検証されずに思い込まれていること、不適切な根拠に基づいて結論されたことを指す。これらを点検すれば、アクティビティの新しい可能性が見えてくるはずだ。

一例を挙げよう。一般的に「生徒は自分のことな

ら興味をもって話す」と思われている。しかし「I ate breakfast at 7 a.m. yesterday」と事実を言うとき、または聞くとき、本当にそれほどワクワクするものだろうか。筆者の開発グループは、引いたカードに従って架空の生活を「I ate breakfast at 3 p.m. yesterday」のように言ってから“because...”とその説明を考えて話すゲームを作った。このゲームを使うと、中学生も大人も夢中になって考え、聞き手からは「オ～!!」という声や笑いが自然に沸き起こる。本当の自分のことではないからこそ、自由に想像して話せるときもあるのだ。神話から解き放たれると、新しい可能性の扉が開かれる。

他にも「ヒントやおまけを与えるのが教育的配慮だ」や「事前準備の時間を十分に取るほうがいい」など、まだまだ神話はありそうだ。何ごとも、定説に縛られず、自分で試して確かめるのが一番よい。

(本稿は、2015年に全国英語教育学会で発表した内容に基づいている。)

海外の成功例に学ぶ：フィンランドの英語教育

数学・科学・読解の国際学習到達度調査 (PISA) で常に好成績をあげるフィンランドは、英語教育でも成功している。フィンランド語はウラル語族に属し英語とは大きく異なるが、フィンランドの TOEFL iBT の平均点はいつも世界の上位十傑に入る。学校の英語の授業総時数は日本の3分の2程度だと言われているのに、フィンランドの生徒や教師は自国の英語教育はうまくいっていると言う。

筆者は2011年9月にフィンランドの小・中・高の授業を参観する機会を得た。そこでいくつかの成功要因に気づいた。本稿では日本の中学校英語に相当する彼の地の小学校教科英語について述べる(フィンランドでは小3から45分授業が週2回ある)。

フィンランドの成功要因の1つは少人数学級である。小学校の学級定員は24人だが、英語の授業は半分の12人に分けて行われていた。英語専科の先生が児童一人ひとりに基礎基本を丁寧に指導していた。

成功要因の第2は教材である。教科書の判型や厚

松沢伸二 Matsuzawa Shinji (新潟大学)

さは今年から使われる NEW CROWN 同様だが、CD付きであった。一方ワークブックは日本の通常のもの3冊ぶんの厚さがあった。そこには言語材料の習得と言語技能の伸長に有効な課題が豊富に用意されていた。自律を育む学びの振り返りカードもあった。教師はデジタル版を使って教科書とワークブック「を」教える授業をしていた。日本の英語教師が作る類いの自作ワークシートは不要であった。

第3の成功要因は宿題である。ある学校での授業後の対談で、元教師が「フィンランドの学力を支えているのは宿題です」と明言した。参観した授業の多くでは教師がワークブックの課題のいくつかを宿題に指定し、次時の授業の前半に決まって宿題のチェックを行っていた。少人数なので、授業中に点検しても数分で漏れなく終了できていた。

以上のように、フィンランドは少人数、教材、宿題で成果を出していた。これからの日本の学校英語教育にも、これらの成功要因を最大限取り込みたい。

英語で授業

「授業は英語で行う」とは、授業中の教師の発話をすべて英語で行えばよいのではなく、教師が話したり、書いたりする英語が、生徒にとって英語の運用能力をつけるためのインプットやモデルとなるようにするとともに、生徒が英語でアウトプットしようとする意欲を高め、そのための課題や時間を与えるなど、英語によるコミュニケーションを授業の中心に据えることだと思います。

言語材料の導入や理解を促す場面においては、教師から積極的に teacher talk で、語りかけたいものです。それをよりよいインプットにするためには、生徒にとってその英語が理解可能であり、聞く必要性がある、あるいは聞きたいと思える内容にすることです。この点において、生徒がどのような単語や表現を知っているか、またどのような話題に興味・関心を示すかを最も理解している教師が話す英語は、最適な教材となります。さらに、教師が積極的に英語で語りかけることで、「英語を使えるようになりた

谷口友隆 Taniguchi Tomotaka (相模原市立由野台中学校)

い」と生徒は思うようになり、「自分も英語で表現してみよう」という雰囲気教室の中に生まれます。

そこで、生徒が英語で自己表現する課題や、生徒同士のコミュニケーションが行える場面を計画的に設定し、生徒が英語を主体的に使用する時間を授業の中に位置づけることが大切です。実際に英語を使用する経験や英語が通じた喜びを通じて、生徒は英語学習やコミュニケーションの楽しさを実感し、さらなる学習への動機付けにもつながります。

小学校で培った「素地」を活かし、高等学校で求められるコミュニケーション能力を生徒が身につけることを念頭に、これからの中学校の授業では、教師・生徒間、および生徒間で、英語によるコミュニケーションを体験的に学習させることが、よりいっそう求められていくことと思いますし、それを端的に表現した言葉が「授業は英語で行う」ということだと思います。教師も生徒と一緒にコミュニケーションを楽しむ。そんな授業を目指したいものです。

今求められる、「言語情報処理の自動化」の重要性

外国語運用能力の育成には、その基盤となる「知識の形成」と「運用スキルの習熟」を図ることが必要です。いかに言語処理の自動化を図るか、大雑把に言えば、「宣言的記憶」を「手続き記憶」に移行することが重要だと言えます。

例えば、人が話すときには、①発話すべきメッセージをつくる（概念化）、②そのメッセージをレキシコンの情報を参照し、文法構造や音韻構造に対応づける（形式化）、③調音し、アウトプットする、というプロセスをたどると考えられています。これらの操作を同時並行的に行うことで、流暢に話すことができるのです。母語話者にはたやすく、外国語学習者に難しいのは、②の段階です。この段階では、(1)レキシコンから語彙を検索・選択する、(2)選択された語彙に文法機能（主語、目的語など）を割り当てる、(3)統語構造を組み立てる、(4)語尾を変化させる、といったさまざまな操作が行われます。

文を理解するときにも同じことが言えるようです。

横川博一 Yokokawa Hirokazu (神戸大学)

言語研究に脳波の成分を利用した実験が行われていますが、Mike listened to Max's *orange about war. のような意味的に不適格な文に対しては N400 という成分が出現します。外国語学習者の場合にも、そうした現象が見られます。一方、Yesterday he *play a guitar. のような形態統語違反、Susan liked *Jack's about joke the man. のような句構造違反に対しては、LAN と呼ばれる早期に行われる文法判断にかかわる成分が出現するはずですが、外国語学習者では、一般に、こうした成分の出現が観察されていません。これらのことから明らかなように、語彙と文法を操作することに関わる処理が、外国語学習者には決定的に難しいのです。

「手続き記憶」に移行させるために、文法の明示的な説明に加え、①文単位で何も見ずに復唱する、②キーワードだけを手がかりに文を組み立てる、③内容理解の Q&A を生徒同士ですばやく言う、といった音声中心の活動を継続的に行うとよいでしょう。

「ハイブリッド PPP(HPPP)」で運用能力の育成を

中高の英語の授業では、伝統的に提示 (presentation)・練習 (practice)・使用 (production) の PPP アプローチが行われてきた。Presentation において目標文法項目を提示・説明し、Practice においてその文法項目についての練習を行い、最後の Production において目標文法を使ったコミュニケーション活動が行われるという流れは教科書とも整合性があり、教師としても非常にやり易い方法であるといえる。しかしながら、正確さを重視するあまり本当のコミュニケーション能力につながらない、第二言語習得の理論に反している、習った語を意図的に使えるのはその場だけである等の問題があるのも事実である。そこで、コミュニケーション・アプローチやタスク中心指導法の利点をも取り入れた、主に英語で行う「ハイブリッド PPP」を提案したい。Presentation では、目標文法を含んだ teacher-talk をインタラクティブに行い、生徒自身に文法に気づかせるようにする。この英語での帰納的指導に、日本語での簡潔な演繹的な

佐藤臨太郎 Sato Rintaro (奈良教育大学)

指導を加えてもかまわない。Practice では機械的な練習に、生徒に目標文法を使って自分自身に関連する英文を作らせ暗記し他者に伝える等の活動を加える。Production においては、最初は目標文法使用を義務付けた活動を行い、次に、自由度の高い文法項目を指定しない活動を行う。Practice では正確性を重視し、Production の第一段階の活動では正確性と流暢さ、第二段階では流暢さに重きを置くようにする。こうみると、伝統的 PPP に近く、本物のコミュニケーションとは違うのではないかと思われるかもしれない。しかしながら、実際の教育現場での伝統的 PPP では最初の 2 つの P が重視され、最後の P が省略されているケースが多いのではないだろうか。提案している HPPP では形式ではなく、内容に重きを置く最後の P を最も重視している。この HPPP は、日本の学習環境に適した、学習者に優しい、英語での授業とも親和性の高い指導法だと考えている。「温故知新」で授業を変えてみませんか！

グローバル化こそローカル化：日本を語れる国際人に

大島希巳江 Oshima Kimie (神奈川大学)

近年、学校も企業もどちらを向いてもグローバル化が推し進められる世の中となりました。日本から一歩も出なくても、世界から人々が日本へやってきており、日本国内もどんどんグローバル化しています。今の中学生が社会人になるころには、日本企業でも隣の同僚が日本人であるとは限りません。日本にいても世界に飛び出しても国際社会と言われる時代、どのような英語力をつけてどのような国際人になっていくべきなのかを中学生も考えなければなりません。私たちは日本人という名の国際人になるわけですから、やはり日本の文化習慣、価値観、言語、社会などについて英語で説明できるようにならなければなりません。自分たちの言動の一つ一つ、例えばなぜ私たちは靴を脱いで家に入るのか、音を立てて麺類を食べるのか、身内の者を悪く言う(謙遜する)のか、世界の人たちにとっては不思議がいっぱいです。このような世界との違いを包み隠すのではなく、堂々と紹介する、説明する英語力が必要です。

簡単な一言や一行の翻訳ではなく、たくさんの言葉を尽くして説明すればよいのです。

では、どのような英語が日本人らしいのか。それは、発音や文法ではなく、表現に特に表れると思います。例えば「そんなの簡単だよ」は、“That’s easy.”という言い方が最もシンプルですが、英語圏には“it’s a piece of cake.”というシャレた言い方があります。この表現を覚えるのもいいですが、私たち日本人がどうしても使わなければならないということではないと思います。私たちなら“i can do it before breakfast!”を使うほうが自分らしいアイデンティティが表現できます。当然、世界の人々はこの表現をまだまだ知りませんから、この意味を説明してあげる、そういう英語力が必要です。そこから新しいコミュニケーションが生まれて、相互理解を進めるきっかけにもなります。グローバル社会だからこそ、日本のローカル文化にも強くなる、そんな国際人を目指してほしいものです。

既存の境界線を越えた言語・文化理解

田嶋美砂子 Tajima Misako (元星美学園中学校・高等学校)

多言語・多文化主義の重要性が強調される昨今、どの英語教科書においても、英語圏以外の国や地域が積極的に扱われています。このことは生徒たちの学びに「伴走」する登場人物の顔ぶれからも読み取れるでしょう。手前味噌ではありますが、このような志向はNCから始まったと言われています。1978年に発行された初版でケニアが登場して以降、従来の教科書では見られなかった題材が多数生み出されました。その背景として、「英語圏の歴史を真に理解するには、アジアやアフリカにも目を向けなければならない」という理念があったと聞いています。

は文化を語ることの難しさも日々痛感しています。ある事柄の記述が「X国のX文化」という固定的な見方を促進することに加担してはいないだろうかという懸念が頭をよぎるのです。

それから35年余りが経過した現在、アジアやアフリカへの言及は特別なことではなくなりました。その他の地域も同様です。時には「まだ扱われていない国はどこか」という躍起な探求さえ、各教科書からは感じられるほどです。そこには生徒たちに世界の諸事情を知ってもらいたいという願いが反映されていると言えます。その反面、一編集委員として

最近の社会言語学では、これまでの本質主義的な言語・文化理解を乗り越えようとする動向が見られます。それは「国・言語・文化・民族」間の関係をより流動的なものとして捉える試みです。実際、移民の多いシドニーで暮らしていると、レストランで働くタイ出身者から「日本的な」お辞儀とともに英語と日本語で挨拶され、こちらも両方を用いて注文しつつも、帰り際にはタイ語でお礼を述べるなどのやりとりがしばしば起こります。

異文化理解の一環として、「X国のX文化」を取り上げるのは大変重要なことです。それと同時に、既存の境界線を越えた言語・文化活動について学ぶ機会を提供することも、これからの外国語(英語)教育には必要なのではないのでしょうか。